

## はしがき

本報告書は、2012年度より2014年度まで日本学術振興会科学研究費助成事業の支援を得て推進した基盤研究(B)課題研究「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」(Comprehensive Study on Language Education Methods and Cross-linguistic Proficiency Evaluation Methods for Asian Languages) (課題番号: 24320104、代表者富盛伸夫)の研究報告書です。去る2014年3月には、3年間の活動期間の前半に行った調査及び基礎研究をまとめて、すでに中間報告書として刊行し、Webでも発信していますが ([http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/ASIA\\_kaken/houkokusho.html](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/ASIA_kaken/houkokusho.html))、本書はそれに引き続き、最終年度である2014年度の活動を中心にその成果をまとめて発表するものです。Web上でも本科研のホームページ内に ([http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/ASIA\\_kaken/index.html](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/ASIA_kaken/index.html))、PDF形式にて同様の内容を掲載しますのであわせてご覧ください。

本課題研究は、東京外国語大学語学研究所を拠点にして遂行した2つの先行する基礎的研究の上になるものです。まず、2006年度より基盤研究(B)課題研究「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究(3年間、代表者富盛伸夫)では、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages「ヨーロッパ共通言語参照枠組み」)の実施間もない時期からEU参加各国に研究分担者を派遣して、その理念と実施面での整合性や取り組みに見られた微妙な温度差を調査しました。続く2009年度より開始した基盤研究(B)課題研究「EUおよび日本の高等教育機関における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)では、ポーランド・プロセスの進む欧州の大学を中心にCEFRの浸透度と通言語的枠組みの有効性を考察しました。このような問題意識を引き継ぎつつ形成された本科研は、日本を含め非ヨーロッパ世界にも拡大適用されようとする流れの中で、いわばEUローカルの言語能力参照枠組みの再検証を行おうとしたものであります。近い将来には世界諸言語の特性や社会・文化的特質を超えた統合的枠組みに向かうか、あるいは個々のブロック地域的な枠組みを開発する方向に向かうかという大きな問題が生じるであろうと予想されます。

最後に、多くの研究会・講演会・シンポジウムなどでの協働事業や研究拠点としても多大な便宜を図っていただいた東京外国語大学語学研究所と世界言語社会教育センター、および事務局の方々、さらに研究連携をはかってくださった国内外の大学・研究機関に感謝するとともに、運営全般において貴重な助言とともに研究補助や編集作業をしていただいた東京外国語大学語学研究所事務補佐の深尾啓子さん、本学大学院総合国際学研究所博士後期課程学生ソ・アルムさん、同外国語学部学生李迎日さんに深く御礼申し上げます。

2015年3月

研究代表者 富盛伸夫 (東京外国語大学)